

平塚柔道物語 58

読者からの手紙

平塚柔道協会 会長 奥山晴治

平塚柔道物語も今回で58回目になりました。ここで、この物語の読者（協会外）からの手紙を一部紹介したいと思います。

最初はAさんからの手紙です。「23号の『素質を見抜く』を読ませて頂きました。私は何度も繰り返し読み、読む度毎に強い感動が湧き上がって参りました。特に後半の『一人一人の生徒の将来を真剣に考える思いやりがある・・真田は生徒の素質を見抜き才能を引き出し、多くの優れた選手を育ててきた。その根源は何か、それは人を育てようとする半端でない彼の情熱であり生きがいそのものである』には思わず涙しました。というのは、私は教員（中学校）時代、これとは全く逆のことを、E子という女子生徒にしてしまいました。当時E子はとても個性の強い感受性のある生徒で、集団ルールになじめずに、スカートを短くしたり、髪を染めたりしていました。これは実は後でわかったことなのですが、非行の前ぶれでも何でもなく、彼女の美に対する自己主張でした。しかし、当時の私はそんな彼女の深い気持ちなど知る由もなく、また知ろうともせず、ただ周囲の学校のルールを形式的に押し付けました。その背景には、E子を育てようという気持ちとは裏腹に、ただ周りの職員に私が良く見られたい、浮きたくない・・との自己保身があったと思います。結局E子は誰にも理解されることもなく、つまらない中学時代を過ごしてしまいました。今でも私はどうしてあの時、周りの職員と闘ってE子を守ってやらなかったのだろう！！どうしてE子の鋭い美のセンスを育ててやらなかったのだろうと悔やまれてなりません・・」と。

続いてBさんである。「とても興味深く読ませて頂いております。そして読みながら、昔の私自身に重ねてみました。『木村大樹君がいつも一歩手前で逃げてきたように思う。これが俺の弱さではなかったのか』との述懐に当時の私を重ねてみていたのです。実は、私は大野中学校時代、柔道部に入っていました。当時の顧問は〇〇先生でした。しかし自分の心の弱さ故に長続きせず、中学一年生半ばで退部してしまいま

した。また他の号で文中に『相手の命の中に叩き込む』という節がありましたが、とても迫力のある躍動を感じさせる言葉です。ある本に『命という字は、人は一回叩かれる』とありましたが、これも同義語でしょう。人は愛を叩き込まれて始めて真の成長をするのかも知れません。今後の連載を楽しみにしております。」

次はCさんである。「恩師の暖かいひとことがいかに大きな力となって生徒の人生に寄与するかを思い知らされました。考えてみますに、私も今までいかに多くの人々の激励と支えにより生かされて来たかがわかりました。最近では『ありがとう』という言葉の素晴らしさが特に印象的です。どうぞこれからもよろしくお願ひします。」

次はDさんである。「25号の『花が咲かないときは根を伸ばせ』です。これはまさにレベルの高い人のみが発することの出来る金言です。このような言葉の宝物は私にとって何よりの財産です。また『柔道は肌と肌でぶつかり互いの信頼と命綱が強くなる』にはとても感服させられました。このような形で柔道をとらえるとは美事のひとことに尽きます。まさに一本、技ありです。これからも健康盛運なることを祈念申し上げます。」

以上、一部ではありますが、4人の方からの手紙を紹介しました。皆、読みながら、自分の人生に置き換えて考えて下さったことがうれしく思います。また真田教師の活躍に皆さんが共感して下さったことが感動です。そして、読者の方々にたくさんの元気を頂きました。まだまだ続く『平塚柔道物語』をどうぞよろしくお願ひ致します。



読者からの数々の手紙